

氏 名	金子 紀子
学位の種類	博士（人間文化科学）
学位記番号	甲第人19号
学位授与年月日	2019（平成31）年3月15日
学位授与の要件	東京女子大学学位規程第3条第3項第1号
学位論文題目	和泉式部の和歌の研究—三つの歌材で読み解く和歌の特質— The Study of the Poems of Izumi Shikibu : the Characteristics by Analyzing the Three Subject Materials of Her Poems
論文審査委員	主査 教授 今井 久代 副査 教授 山本 真吾 副査 教授 和田 博文 副査 千葉大学教授 鈴木 宏子

内容の要旨および審査の結果の要旨

I. 論文内容の要旨

本研究は、和泉式部の和歌の特質を、「あやめ草」「桜」「露」という三つの歌材を詠んだ歌を網羅的に分析する（読み解く）という方法により、明らかにするものである。この三つの歌材を特に取り上げたのは、①「菖蒲（あやめ草）」は五月五日の節句行事と結びついた「折」を歌う歌材で、和泉式部の「折」意識を窺うに格好の歌材であるから ②「桜」は和歌において最も伝統的な歌材の一つで、和歌史のなかの和泉式部を窺い知れるから ③「露」も古来和歌に多く詠まれた歌材であると共に、仏典（『金剛般若経』等）に「一切の有為法は、夢幻泡影の如く、露の如く、また雷の如し。まさには是くの如きの観を作すべし」とあるように無常ではかないものの喩とされた景物であ

り、和泉式部が無常観をいかに詠んでいるかを窺い知るのに最適な歌材と考えられるから といった理由による。

こうして選んだ「あやめ草」「桜」「露」の同時代までの詠みようを確認するために、私家集や勅撰集（詠歌数の多い「桜」「露」は勅撰集のみを参観）におけるそれぞれを抽出し、一首一首確認して大まかな傾向を捉えたうえで、和泉式部はそれらをどのように詠んでいるかを考察した。全体として、人間関係のなかでの贈答歌、あるいは独詠であっても人間関係の陰影が揺曳する場における和歌に、詳しい詞書との呼応も相まって、一つの歌境とも言うべき面白さが発揮されている例が、多く確認できた。このため最終章として、上記三つの歌材の歌を見てゆく中で、従来特に注目されずにきたが、詞書で数首をつないでゆき、総体として一つのエピソードを為すような、ある種の物語的歌群を為している事例を三つ取り上げ、それらがどのような構成意識のもと、詞書と呼応して興味深い歌境を作り上げているか、歌群の創意性について考察した。なかでも正集と続集に重出しているものについては、両者の意味するところを丹念に比べた上で、いかに創意性というべき構成意識が獲得されているかについて、考察した。

全体として和泉式部の和歌には、ふと思いつきで口からすらすら出てきた歌と受け取られかねないほどの、軽妙でリズム感あふれる調べを持った歌が多く、通常和歌に詠まれない俗語と思われる表現も目に付くが、その実非常に豊富な知識（和歌、漢詩、仏教、行事など）と卓越した言語感覚に支えられた、非常によく考えられて詠まれた歌であることが確認できた。上記三つの歌材においては、人間関係の中における孤独や、孤独だからこその愛着（渴望）と移り変わる世への諦観が窺える歌が、繰り返し登場した。これはもはや実人生を投影しての詠歌にとどまらず、人間関係を誇張して、あるいは時に孤独な詠歌主体を設定して、「孤独」のなかの恋着や、人の世の儂さを見つめる和歌が、意図的に創作されていたのではないかと思われる。

II. 審査の結果の要旨

1. 論文の構成

最初に序、最後に結をもち、その両者の間の構成は、以下の通りである。

第一部 和泉式部についての先行研究 本論のために必要な前提となる知識を整理した。

第一章 和泉式部についての研究史

昭和 63 年までの和泉式部研究の全体を概観し、さらにそれ以後の研究動向として、特にホットで注目されている「百首歌」「五十首歌」「日次詠歌群」の研究をまとめた。

第二章 和泉式部の詠歌史

和泉式部の詠歌のうち創作時期が推定されているものを、これまでに解明された伝記と照らし合わせ、和泉式部がどの時期にどのような文学活動を行なう環境にあったか、その結果どのような歌を詠んでいたかを概観した。

第三章 和泉式部の漢詩文の受容

先行研究をまとめつつ、新たな漢詩文引用の例、および既に指摘されているものについては、踏み込んだ和歌の解釈を示した。

第二部 「菖蒲（あやめ草）の歌

第四章 平安時代の和歌における「あやめ草」

和泉式部の時代までの「あやめ草」詠を調べ、和泉式部の時代の少し前から行事と結びつき種々な形で歌に詠まれるようになった歌材であることを示した。

第五章 和泉式部の「あやめ草」「折」と「恋」

和泉式部が「引かれぬあやめ」という定型表現を編み出し、人間関係の中の孤愁を見つめる歌を盛んに詠んだことを示した。

第三部 「桜」の歌

第六章 「桜歌」の系譜—古今集から後拾遺集へ

多量かつ多様に詠まれてきた平安中期までの「桜」歌について、「折る」「花見」「風」「心」の四語に着目してその特徴を分析し、後拾遺集から歌い方が変化することを示した。

第七章 和泉式部の「桜」の歌

勅撰四集の歌い方に照らしつつ、「折る」「心」という語の歌い方、また和泉式部の「桜」の歌全体を概観した。和泉式部の「桜」歌の場合、後撰集時代の歌い方に近く、人間関係の中での詠歌が中心を占めていると同時に、語彙等は古今集のそれを巧みに換骨奪胎し、また軽妙な調べをもたらす俗語も適宜取り入れ、古今集を受け継ぎながらも興味深い歌い方をしていることを示した。また全体として、関係性への深い愛着が導く孤愁が歌われるさまを確認した。

第八章 和泉式部の『「燈の前に花を思ふ」と云ふ心」の歌をめぐって

中世和歌に特徴的な複雑な(漢字四字の)題による題詠歌であること、この題に導かれて平安中期までには類のない「夜、灯りに照らされる桜」を取り上げたこと、三首を並べ全体としての構成意識が窺われること(連作的展開)など、ある部分時代を先取りし、ある部分中世和歌にはあまり見られない(むしろ万葉集に確認される)特徴をもった和歌三首であることを、この時代の女流歌人としていかなる影響下でなしえたのかも含めて考究し、明らかにした。

第四部 「露」の歌

第九章 勅撰集の「露」の歌—後撰集と後拾遺集を中心に

美意識として、また心情を詠む歌材として、どのような「露」の歌が勅撰集に取りられてきたかを明らかにした。「露」は仏典(金剛般若経など)に、はかないものの喩えとして挙げられるが、無常観(はかない人の生)を詠む歌材としては、後拾遺集の時点でもさほど作例はなく、多くは「涙」の喩、あるいは「恋死」と結びついて歌われることを確認した。

第十章 和泉式部の「露」の歌

和泉式部の場合、勅撰集での歌われ方の伝統を受け継ぎつつ、人間関係のなかで痛感する、人の命(人生)のはかなさを歌う「露」歌もあることを確認した。

第五部 和泉式部家集配列にみる創意性について

第十一章 配列にみる創意性について

「あやめ草」「桜」「露」の歌を確認するなかで浮かび上がってきた、詞書とともに和歌をつなぎ、全体として一つのエピソードを語るらしい歌群について、改めて和泉式部集内での重出や、他の家集との違いを丹念に確認することを通じて、事実を超えたある種の虚構性を持った歌群を創作しようとする創意性について論述した。

2. 論文の特徴

歌人和泉式部の和歌のみならず、平安半ばまでの多量な和歌について、先行研究を博搜してふまえ、また鍵語と思われる表現については、一語一語、和歌における使われ方(和歌での用例の多寡、また使用される場合は他のどのような表現を伴い、どのような意味を持って使われているか)を丹念に明らかにし、一首一首の読みを大切にしながら、全体として和泉式部の和歌として何が浮かび上がるかを、帰納的にあとづけている。古代和歌においては、類想的であることが求められており、多くは集団的な表現となっていながら、かえ

ってそのなかに個的な表現が達成されるとされている。その意味では、実に微細な違いでしかないそれぞれの和歌の特徴を、帰納的にあとづけてゆく場合、多くの和歌を読みこむなかで得られるだろう、鋭い言語感覚と繊細な感受性が必須となるが、それを身につけるために不断の努力を重ねて、誠実に和歌の響きに耳を傾け、関連する先行研究をよく学びながら、丁寧にあとづけた論文である。

3. 論文の評価

和泉式部は、平安時代を代表する女流歌人として著名であるが、その歌人としての大きさに比して、詠歌が十分に研究されているとは言えない。まずは、『和泉式部集・続集』と言われる和泉式部の家集が、最善本でも室町時代の書写であり、かつ和泉式部自身による行き届いた撰集ではない、多数の歌稿や歌反古などが幾回かに渉って増益された他撰本であることが、歌人和泉式部研究に限界を与えている。また『和泉式部日記』に描かれるような実人生のゴシップ性から離れて、中世和歌にも通ずる創意性を持った偉大な歌人として評価・研究されるようになったのは、ここ 30～40 年(1980 年代以降)のことに過ぎない。なお和歌史的な理解について、「古代和歌」から「中世和歌」へ、それぞれの違いと変化についての研究が深められたのも、和泉式部観の変化の少し前からになる。すなわち、場に依存し対人性が強く、日常生活の意思伝達手段の一つのような側面を色濃くもつ「古代和歌」から、具体的な場を離れ、複雑な題を設定して題の本質を詠む題詠歌が中心となり、百なり五十なりの題を組み合わせて全体としての世界を作る(定数歌)のを目指す「中世和歌」へという、大きな詠風の変化があったわけで、和泉式部は、その大転換を準備する和歌の蓄積がなされ、一部は蓄積に飽き足らず新たな方向が模索されはじめるというような、転換の萌芽期に活躍した歌人なのである。これらの難しさゆえに、和泉式部研究では分析対象となる和歌に偏りがあり、初期定数歌や日次詠歌群が特に注目されて、近年の研究対象とされてきた。

本論文の執筆者が学部生として学んだ時期は、こうした研究動向の大きな変化の前で、その頃の素朴な和泉式部観への反発及び和泉式部という歌人への愛着が、大学院に進んで研究を始めた主な動機であった。現在の研究者が、研究動向を踏まえつつ、研究業績として評価されることを第一に考えて研究テーマを選んでゆくのに比べて、観賞と愛好を重んずる、人格を陶冶する教養としての文学の追尋こそが、執筆者の求めたものである。しかしだからこそ、近年の文学研究ではつい置き去りにされてしまう部分に迫る考究となった

ともいえる。すなわち、和泉式部という難解で敬遠されやすい歌人を研究対象に据えて、個性の出にくい伝統的な（集団的な）和歌を一つ一つ読み込むことで、古代和歌の豊かな蓄積に支えられた、この時代の歌人であるからこそ、人間関係に執しつつ孤独を見つめた歌を好んで詠んだ歌人であることを、改めて明らかにした。和泉式部は、複雑な漢字四字題による題詠を試みるなど、中世和歌に通ずる創意性を有しつつも、複数和歌による連作や、詳細な詞書とともに展開する物語的な歌群など、中世和歌ではむしろ失われてゆく創意性を大切にした歌人である。そのあたりが、同時代の、中世和歌の先駆けとなった男性歌人との大きな違いである。そうした和泉式部の詠歌の特徴について、従来見過ごされてきた和歌を対象に、明らかにできたことは本論文の成果であり、たゆまぬ努力と誠実な研究姿勢の賜といえる。

4. 最終試験の概要

1月31日11時より、英語の試験を行った。英語の学力については、やや心許ないところもあったが、最低限のレベルはクリアしているということであった。

続いて2月1日15時より、外部審査委員の鈴木宏子先生（千葉大学教授）をお迎えし、本人から40分ほど論文の内容についての説明がなされたあと、質疑応答となった。内容説明は丁寧にとまとめられており、質疑のうち、その場で答えるべきことは適切に答え、今後丁寧に考えるべきこと（「を」の間投助詞的用法、書写の問題）が確認され、本人からも今後の課題について確認した。鈴木宏子教授からは、特に誠実かつ真摯な研究姿勢についての評価と、「日次詠歌群」研究とも接続し得る、第十一章で取り上げた歌群の研究の可能性について言及があった。